

# 船水 清（ふなみず・きよし）

## 1、プロフィール

昭和5年頃から詩・短歌を作る。同12年旧満州に渡り、敗戦によりソ連抑留を経て帰国。

「北」(三次)「くうたふむ」「現代詩」「オルフェ」同人として詩を発表する。

<生没>

1914(大正3)年8月4日 ~ 2003(平成15)年12月19日

<代表作>

詩集『流離歌』『新しい樹形』

詩集『黙示』

新津軽風土記『わがふるさと』

人物評伝『ここに人ありき』

<青森との関わり>

黒石町(現黒石市)生まれ。昭和22年11月帰国。陸奥新報社に入社し約20年間勤務し退職。

## 2、作家解説

船水清は、昭和12年の秋、24歳で渡満した。“窮鳥のように”という言葉が当時の心境を表わしているが、『月に吠える』の萩原朔太郎に師事し、詩集刊行を意図していた彼は、渡満と戦争のために断念せざるを得ず、戦後の昭和38年になって、ようやく詩集『流離歌』として実現した。従って収載されている詩は、昭和9年から昭和13年までとなっている。

渡満後は仕事に追われ、詩作も途切れがちであったが、詩人逸見猶吉を知り意気投合するが、終戦後、逸見は新京で病死。船水は、ソ連に抑留され、生と死の極限状況を体験する。初期作品と旧満州時代の作品は散佚したが、抑留中は詩作メモとして俳句を作った。(句集『北極光』など)

ソビエトから帰国してまもなく「北」(三次)を始め、戦後の文芸復興として注目された。昭和 29 年から 31 年にかけて、高木恭造、村次郎、植木曜介らと季刊詩誌「くうたふむ」を刊行。いち早く健在ぶりを示した。詩誌「現代詩」「椎の木」同人としても活躍し、北方回帰の吉田一穂らとも交流を深めた。

昭和 41 年、詩集『新しい樹形』を道標社より刊行した。清藤碌郎によれば、「自己凝視と対象への愛が交互に繰り返す波の運動があり(略)多くの詩魂を受容しながらひそかな孤高を軸に遠心と求心をふまえて」といると位置づけられている。彼の詩の特徴は、凝縮された簡潔なスタンザのなかに、内省的で濃密な精神構造を持ち、極限状況にあっても、力強く脈打って、再生する意志を失わず一貫している点にある。昭和 43 年、詩誌「オルフェ」同人となる。

船水は、陸奥新報社に勤務。郷土の風土や人脈の発掘にも情熱を傾け、新津軽風土記『わがふるさと』、人物評伝『ここに人ありき』なども刊行している。千葉県みつわ台に一時転住したが、平成3年帰郷する。その後再び千葉市に転住した。

### 3、資料紹介

#### ○『渤海史詩鈔』

図書

1988(昭和 63)年8月 15 日

210mm×150mm

詩集。渡満後ソ連抑留、帰国後、渤海史についての資料を集めながら詩誌「オルフェ」に発表したものをまとめたもの。かの地に興亡した国の諸民族、そして一挙に失った多くの知己朋友、幼くしてかの地の土と化したわが子を含めた夥しい死者への鎮魂歌である。